

みんなの環境 わたしたちの実践

本実践事例集は、各学校における環境教育の一層の推進を目指し、県内の優れた実践を紹介するものです。

掲載校は、第10回群馬銀行環境財団教育賞において最優秀賞に選ばれた学校です。群馬銀行環境財団教育賞は、群馬県環境教育賞（平成5～19年度）を引き継ぐ形で、平成20年度から実施されているものです。



実践事例

1 小学校における実践

みどり市立福岡中央小学校

「故郷の自然を守ろう
～地域全体で取り組む環境活動～」

2 中学校における実践

藤岡市立東中学校

「地域との共生をめざす
東中環境美化活動！」

3 高等学校における実践

群馬県立藤岡工業高等学校

「藤工環境活動プロジェクト2017
～いろいろな枠組みを生かした多様な
環境活動と環境学習～」

平成30年2月
群馬県教育委員会

小学校における実践事例

みどり市立福岡中央小学校

1 活動名 「故郷の自然を守ろう ～地域全体で取り組む環境活動～」

2 環境教育としてのねらい

さまざまな環境問題が深刻化する中で、地域の自然環境や人との関わりを通して、児童が地域や自然、環境、そして人や職業について学びながら、自然環境保護への意識を高めていくとともに、地域への愛着や誇りをもつことができるようになることをねらいとしました。特に、生息環境の変化や盗掘などによって絶滅の危機にあり、現在は地元の鳴神山系にだけ自生し、国内希少野生動物種に指定されているサクソウ科の植物である「カッコソウ」の学習や林業体験などの活動を通して、身近な自然に関心をもち、その素晴らしさに感動し、環境が人をつくり、人が環境をつくっていることに気づいていけることは、将来に向けて日本の伝統文化の継承や人間関係づくり等にも深く関わっていくものと考えています。

3 学校及び地域の環境の状況

本校はみどり市大間々町の北東部に位置し、近くには渡良瀬川を源流とする小平川が流れ、緑豊かな山々に囲まれ、自然に恵まれた環境にあり、そのため野生動物も多く生息しています。さらに、建物や彫刻、機織りなどの文化財等も数多く残されており、毎年、学年の実態に応じて指導員による地域の文化財めぐりも行っています。しかし、年々児童数が減少してきているため、近隣の小学校と連携した取組も多く取り入れるようになってきました。また、通学区が広いため、スクールバスで登下校をしている児童もいます。

4 活動の内容

1) 地域の自然環境を学ぶ活動

①カッコソウについての学習

地元の保護団体「小平サクソウの会」の方を学校に招いて、カッコソウの花型や色の多様性、歴史、繁殖方法、周囲の環境や他の生き物との関わりを講義から学んでいます。特に、氷河期から生き抜いてきた術や、なぜ絶滅危惧種に指定されたかなど、その進化や保護について知ることができます。その後、6年生が学習したことを地元の保護団体主催のツアーで参加者に向けて発表したり、全校集会でカッコソウの特徴や保護を始めた経緯を劇やクイズ、掲示物を作成して全校児童に分かりやすく伝えたりしています。また、保護者や地域にも情報発信をしています。

②フォレストリースクール

生活科「たのしさいっぱい、あきいっぱい」、理科「季節と生き物(秋)」と関連させ、校庭や学校周辺にある木々の名前や特徴、秋の木々の様子や変化、近くに住む動物などについて、地元の環境保護団体の方に教えていただいています。

昨年度は、校庭にある木から自分の好きな葉をとってきて画用紙に貼り、好きな理由や特徴などをまとめ、1・2年生で交流しました。葉のにおいを嗅いだり、木の名前を本で調べたりするなど、児童は自然に関心を持ち積極的に活動していました。3・4年生は、それぞれの木々の特徴や人々の生活との関わり、木に生息している動物や昆虫などについて学びました。児童は、動物によって木の実の食べ方が異なること、柏や月桂樹の葉は独特な香りがすること、料理や飾りなどにも使われていることを知ることができ、自分たちの生活に環境が深く関わっていることを実感することができました。

また、群馬県で盛んに行われてきた養蚕についても説明していただき、絹産業の歴史や、現在も受け継がれている地域の機織りなどの伝統工芸についても考える機会になっています。

③林業体験

5年の社会科「わたしたちの生活と林」と関連させ、群馬県の「フォレストリースクール」事業を活用し、人工林内の林業体験を通して学習を行っています。【写真1】



【写真1】 5年生の林業体験

県緑化推進課及び桐生森林事務所、地域にある大間々林業研究会と連携を図り、児童は森林の役割、林業の仕事、環境保護等について学びます。そこでは、林野庁から「森の名人」に認定され、ロープ1本で木に登り枝打ちを行う技や20mを超

える杉の木をチェーンソーで伐採する様子を見学させていただいたり、林業に携わる人たちの次世代への思いを聞かせてもらったりしています。児童は、「木を切ることは悪いことだと思っていたが、木を切ることは森を育てることだと分かった」「この森を私たちが守っていかなければならない」という感想をもつことができました。林業体験の最後には、児童はのこぎりでスギの木を切り倒し、それをさらに細かく切り分けてコースターを作りました。児童にとって、資源としての木の大切さや森を育てる仕事である林業の重要性について考える機会となっています。その他にも、森にある樹木や花、果実などを観察し、名前や特徴などを教えてもらっています。お茶の木から葉をちぎり口に含んだときは、その苦みや香りの強さに顔をしかめたり、驚いたりするなど、児童は身近な所にある自然の素晴らしさを実感することができました。

この林業体験は、今年度より同じ中学校区にある大間々北小学校と一緒に活動するようになりました。このことは、将来、中一ギャップの解消にもつながるものであると考えています。

④環境教室への参加

桐生市・みどり市合同で行った「環境教室」に参加し、足尾銅山の鉱毒問題を

通して、人と自然、人々の生活や環境破壊について学び、夏休みに足尾の山に行き、植樹活動に参加しました。

2) 地域の自然を守る活動

①カッコソウの保全・保護活動

地元の小平に数カ所ある保護管理地に行き、主に6年生が小平サクラソウの会や地域の方と共にカッコソウの保全・保護活動を行っています。カッコソウの生育条件を実際に現地で確認し、カッコソウが繁殖しやすいように定期的に植えかえや除草を行ったり、落ち葉をかけて新しい葉や根が育ちやすいようにしたりしています。10月頃に苗を掘り上げ、鉢に植えかえをします。



【写真2】

【写真2】 カッコソウの植えかえ

その後、気象状況などを踏まえながら状態を見守り続け、卒業式には児童が植えかえを行ったカッコソウを会場に飾りました。昨年度は寒い日が続き、生育が遅れていたため、卒業式に花が咲くように地域の方に協力してもらい、日向に鉢を移動したり、ビニールハウスで温度管理をしたりしていただきました。その結果、卒業式の2日前に小さな花が2輪咲き、卒業式会場に飾ることができました。児童は、この保護活動を通して、「私たちが住む地域には、世界に誇れるものがある。そして、私たちは地域の自然を守っていかねばならない」という思いをもつことができました。

②山野草の栽培

「カッコソウ」は管理地から持ち出せないため、小平サクラソウの会の協力を得て、同じサクラソウ科の「日本サクラソウ」と「クリンソウ」の苗を数回にわたって移植を手伝っていただき育てています。鉢植えは教室のベランダに置き、その他に学校の花壇やわくわく川（学校敷地内にあるビオトープ）の近くに群生するように植樹し、「サクラソウがたくさん咲く学校」を目指しています。育てたサクラソウは、6年生が卒業するときに持ち帰り、卒業後も家で育てています。

③学校内の川や校庭、通学路の清掃

保護者や生涯学習推進協議会、地元企業の協力を得て、通学路や学校内の清掃を行っています。特に、学校の敷地内にあるわくわく川には、鯉や沢ガニ、季節によってはヤゴなどの水生生物が生息しており、年に1度、その川の水を吸い上げ、川の清掃を行います。児童にとって、川がきれいになることで、そこに住む生き物がより観察しやすくなっています。また、9月には、地域と合同で運動会を実施するため、保護者や地域の方と一緒に校庭の除草作業なども行います。

④稲作体験

地元の田植え組合の方の指導の下、全校で稲作を行っています。上級生が下級生に田植えや稲刈りの仕方を伝える本校の伝統的な活動になっています。収穫したもち米を使って、保護者の方にも協力していただき、もちつき集会や赤飯づく

りを行い、お世話になった地域の方を学校に招いて感謝の気持ちを伝えています。赤飯用の小豆（ササゲ）も学校で育てたものを使用しています。

5 成果と今後の課題

1) 成果

- 環境教育を通して、児童は身近な所にある自然の素晴らしさや人と自然とのつながりを実感でき、情操教育にもつながっていると考えられます。
- 林業体験では、森や森林に関わる仕事の多様さと森を育てることの重要性を体験し、そこで働く人たちの姿を見ることで、日本の伝統文化や伝統技能にも触れることができ、キャリア教育にもつながっていると考えられます。
- カッコソウ保護の活動では、絶滅危惧種になった原因を学んだことで環境の変化や盗掘など、環境問題についての知識を得たり、関心を高めたりすることができました。そして、自然や生命、さらには人を大切に思う心、一つのことに集中して根気よく努力を続けることの重要性を感じとり、そのことが他の教育活動にも生かされています。
- 児童は自分たちが住む地域に希少な環境資源が存在することに気づき、地域や学校への愛着や誇りが深まっています。
- 地元の保護団体や田植え組合の方など、地域と連携した活動を行ったことで、地域と学校のつながりが深まるとともに、地域の学校への支援体制がより強くなってきています。
- 林業体験やカッコソウの保護活動の様子を学校のホームページに掲載したり、地元の新聞社や広報誌に取材してもらったりしたことで、活動の様子が地域や近隣の学校に伝わり、同様の活動をしてみたいという要望がありました。小小連携を図り、今年度より林業体験を同じ中学校区にある小学校と一緒に活動を行い、そのことが中一ギャップの解消にもつながるものと考えています。

2) 課題

- 今後、児童数の減少が予想され、学校としてこれまでと同じような取組をしていくことが難しくなる可能性があります。保護者や地域の方との連携を深め、協力体制を強化していく必要があると考えます。また、近隣の小学校との連携を大切にし、より充実した活動になるよう努めたいと考えています。
- 地域の特色を生かしたカッコソウや林業などの体験活動を先輩から後輩に引き継いでいき、それが本校の伝統行事にしていけるように改善や工夫を図りながら、今後も計画していきたいと考えています。
- 環境保護は地域だけの問題ではなく、すべての人たちに関わる問題であると捉えています。そのため、どのようにして本校の取組をさらに広く発信し啓発活動につなげていくか、その手立てを考えていく必要があります。
- 教科横断的な環境教育の充実を図っていく上で、総合的な学習の時間、理科、社会科、生活科だけではなく、道徳や特別活動とも関連づけていく必要があると考えています。

中学校における実践事例

藤岡市立東中学校

1 活動名 「地域との共生をめざす東中環境美化活動！」

2 環境教育としてのねらい

アルミ缶回収、草花の栽培、地域美化活動の3つの活動を通して、資源の有効活用や資源を大切にすることを養うと共に、環境美化や感謝の心の育成、共生の心の涵養などを図ることをねらいとしています。また、地域の中で、様々な人とのつながりを意識し、自分たちの手でできることは何かを全校生徒で考え、自主的に実践していく活動を通して、生徒の環境意識の高揚を図りました。

3 学校及び地域の環境の状況

本校は市の南西部にあり、中心市街地の南端に位置しています。周辺には住宅団地をはじめとして民家が点在していますが、その周りはまだまだ田畑等が多く見られる準農村地帯です。学校の西側一帯には市のシンボルである庚申山がそびえ、市民の憩いの場となる自然公園があり、生徒は緑に囲まれた地で生活し、自ずと自然に親しんでいます。

4 活動の内容

1) 全校アルミ缶回収活動

本校では、全校生徒参加でアルミ缶回収活動を行っています。生徒は、家庭で出たアルミ缶や親戚、知人、近所の人などから頂いたアルミ缶を袋に入れ、登校時に持参します。中には、近所のスーパーやコンビニに協力を依頼して集めておいてもらい、一度に何百という数のアルミ缶を持ってくる生徒もいます。このような取組の結果、今年度は全校で23万缶を回収することができました。

このアルミ缶をリサイクル業者に引き取ってもらった収益金の一部を使い、地域の福祉施設や被災地の小学校へ支援を行っています。生徒は自分たちが行っているアルミ缶回収が資源の有効活用に役立つだけでなく、人の役に立つことを知り、「人の役に立つ喜び」を実感することができました。

①生徒の活動へのかかわり方

本校の環境美化活動は全校生徒で取り組んでおり、推進役を生徒会（専門委員会）が務めています。「アルミ缶回収」についてはJRC委員会が主となって取り組んでいます。

まず4月には、JRC委員がアルミ缶回収の意義や収益金の使い方について全校生徒に説明したり、JRC通信で伝えたりしています。そして、全校生徒が持ってきたアルミ缶は、クラスのJRC委員が数を



アルミ缶回収の様子

数え、廊下の掲示板にその日の個数をクラスごとに記載し、総累計数をクラス対抗で競うようにしています。また、JRC委員は全校の総数を集計し、全校生徒に知らせ、目標達成に向けて意欲付けを図っています。なお、JRC委員会では、一人が持ってきた数の多さを競うよりも、全員が回収に参加することを大きな意義と考えています。そこで、各クラスの回収数のみでなく、回収への参加率も掲示物で知らせ、全校生徒へ環境美化への意識をもたせるようにしています。

また、地域の福祉施設及び被災小学校への支援については、JRC委員が各施設を訪問し、交流をしながら手渡すようにしています。

②活動の地域への広がりや地域との連携

「アルミ缶回収」については、地域の方々、生徒の描いたポスターや地域への回覧板での広報活動により本活動を知り、軽トラックや自家用車でたくさんのアルミ缶を持ってきてくださるようになりました。また、高齢の方が引取りの依頼を電話連絡してくださる等、地域での取組としても広がりを見せています。

なお2学年では、チャレンジウイークという1週間にわたる職場体験学習でお世話になる市内約50事業所にアルミ缶回収ボックスを置かせてもらい、1週間に一度回収にうかがいました。

2) 花いっぱい運動

本校ではアルミ缶回収で得た収益金の一部を使い、花の種や土、肥料、プランターなどを購入し、「花いっぱい運動」に取り組んでいます。春にはサフィニア、夏から秋にかけてはマリーゴールド、冬から春にかけてはパンジーが、校内のプランターはもとより、学校の周囲に設けられた広大な周回花壇に咲き乱れ、生徒のみならず地域の方々の目を喜ばせています。

①生徒の活動へのかかわり方

「花いっぱい運動」については、園芸委員会が中心となり取り組んでいますが、校庭の周囲にある周回花壇については、範囲も広く水やりも大変なため、各部活動単位で担当を決め、責任もって草花の手入れを行うように計画しました。

春には園芸委員会がポットにマリーゴールドの種をまき、苗が育った頃に校庭南側と西側のフェンス沿い200mにわたって植栽します。また、園芸委員会がサフィニアの苗を購入し、プランターに植え、ベランダや校庭に飾ります。

冬には、園芸委員会がパンジーの苗を育て、周回花壇等一帯をパンジーで飾ります。このパンジーは入学式の頃まで咲き続け、花の少ない4月当初でも新1年生を気持ちよく出迎えてくれます。

②活動の地域への広がりや地域との連携

「花いっぱい運動」については、地域にある農業系の高校の先生や生徒が栽培の仕方を教えてくれたり、地域の学校支援ボランティアの方が花壇の手入れを手伝ってくれたりするなど、地域全体を花で飾ろうとする機運が生まれています。

3) 東中校区クリーンアップ作戦

年に3回、地域の要望等を踏まえながら全校生徒で地域に出て、環境整備活動を行っています。クラスごとに分担箇所を決め、通学路や幹線道路、公共施設等のごみ拾いや除草等を行っています。また、3回のうち1回はPTAと協力し、親子で協力し

ながら環境整備作業を進めています。作業終了後には、PTA運営委員の皆さんの協力で豚汁を全員に振舞い、労をねぎらってもらっています。

①生徒の活動へのかかわり方

「東中学校区クリーンアップ作戦」については美化委員会が担当し、道具の準備、回収後のごみの分別等を自主的に行っています。

②活動の地域への広がりや地域との連携

「東中学校区クリーンアップ作戦」では、生徒が出向いた各施設で、美化活動への協力をしてくださる方がたくさん現れるなど、地域全体での美化活動の高まりを感じます。

生徒は地域に出て奉仕活動をすることで、いろいろな人とのつながりを感じながら地域を愛する心を育てていきます。



地域に出てゴミ拾いをする生徒

5 成果と今後の課題

1) 成果

- 「アルミ缶回収」では、生徒はアルミ缶のポイ捨てをやめる、登校途中に落ちているアルミ缶は拾って登校するなど資源を無駄にしない心や、資源は有効活用しなければいけないという心が育っています。また「地域の福祉施設及び被災地小学校への支援」では、涙を流して喜ぶ老人たちの姿や満面の笑みでボールをもって遊ぶ小学生のビデオレターを見て、涙を流す生徒も多く、「誰にでもできるアルミ缶回収で人の役に立った」という「人の役に立つ喜び」を感じることができました。
- 「花いっぱい活動」では、咲き誇る花には一年間いたずら等一切なく、自分より弱い物や何も言わぬ物への思いやりの心や、水をあげないと枯れてしまうという責任感などが育っています。
- 「東中学校区クリーンアップ作戦」では、自分たちの住んでいる地域をきれいにする活動を通して、ごみのポイ捨てをする生徒がいなくなるなど、自分たちで地域を大切にする気持ちが育ちました。また、日ごろから地域の環境を守ってくれている地域の方々に感謝の気持ちをもつようになってきています。

2) 課題

- 「アルミ缶回収」については、本活動を通して資源を有効活用するという意識を今後も高めていきたいと考えています。福祉施設や被災地の支援活動についても、生徒は今後も自分たちでできる支援を精一杯続けていきたいと考えているので、学校としてもこの活動を生徒会活動の中心として支えていきたいと考えています。
- 「花いっぱい運動」によるきれいな学校づくりは、学力向上や豊かな心の育成の基盤となるものであるため、今後も重要視していきたいと思っています。
- 「東中学校区クリーンアップ作戦」については、この活動が地域全体の環境に関する意識を高め、地域貢献への意欲付けになることから、活動範囲を広げるなど今後も発展させていきたいと考えています。

高等学校における実践事例

群馬県立藤岡工業高等学校

1 活動名 「藤工環境活動プロジェクト2017」

～いろいろな枠組みを生かした多様な環境活動と環境学習～

2 環境教育としてのねらい

地球温暖化対策や廃棄物の削減、自然保護などの環境問題は、これからの時代では避けて通ることができません。そこで、本校では昨年度より3年次の全科共通選択科目として「環境工学基礎」を設定したのにあわせて、授業と学校内外での環境活動・環境学習に取り組むための「藤工環境活動プロジェクト」をスタートしました。

環境問題は、一人一人が意識していくことはもちろんのこと、問題の解決には人々の協働が欠かせません。このプロジェクトの特徴は、地域との連携や協働を通して環境活動を実践していくことのできる人材を育成することです。このため、特定の分野・生徒に偏るのではなく、いろいろな参加形態と多様な環境活動・環境学習をプログラム化して、多くの生徒が関わられるようにしています。

さらに、このプロジェクトにより、生徒のコミュニケーション力と学校の発信力を高めていくことも目的としています。

3 学校及び地域の環境の状況

本校は3学科、1学年3クラスからなる工業高校で、単独の工業高校としては全国でも最も小さい規模の学校です。しかし、この規模であるために小回りがきき、環境活動や環境学習を進めやすい状況となっています。

また、藤岡市は、里山と清流が残り自然環境に恵まれていて、市の天然記念物である水生生物も生息しています。このため、市内にはビオトープを設置し、自然環境の保護と環境学習に力を入れている事業所や、環境保全活動を精力的に行っているボランティア団体も多くあり、学校と地域とが連携・協働をしやすい状況にあります。

しかし、藤岡市は、県内の市町村では1人当たりのごみの排出量が上位であることや、鳥獣による農林業被害が見られる地域もあり、市の特有な状況に応じた環境対策も進められています。

4 活動の内容

1) 「藤工環境活動プロジェクト」のプログラム

テーマ (対象者)	協力機関	内 容
廃食用油回収協力事業 (全生徒・教職員)	(株)アープ	家庭で使用済みの食用油を回収し、それを市内のバイオマス発電事業者に提供することにより、エネルギーの有効利用と地球温暖化防止活動を推進する。

紙の再資源化の推進と有価物による社会福祉貢献 (全生徒・教職員)	(株)きみの (社福)あざ 美会	「燃やさない紙を」をスローガンに、学校から排出される紙類を廃棄物処理業者に提供する。また、実習で使用した廃電線類を福祉作業所に提供し、有価物として活用してもらう。
環境科目特別学習 「家庭の省エネルギーと省資源化」 (環境科目選択者)	電気事業者 ガス事業者 水道事業者	家庭のエネルギーや水道使用量、廃棄物に関する調査を行い、グループ研究と発表会を通して、家庭の省エネルギーと節水、廃棄物の減量化を推進する。
環境ボランティア活動 (全生徒のうちの希望者)	環境ボランティア団体 藤岡市文化財保護課	市内のボランティア団体と協力して、希少生物の生息地域の環境保全活動を行う。また、市と連携して国の指定史跡周辺の植生環境整備活動も行う。
「ぐんま環境学校」への参加 (環境科目選択者のうちの希望者)	群馬県環境政策課	環境に関する幅広い分野の講義やフィールドワークの受講を通して、地域の環境活動に自ら進んで取り組む人材の養成を目的とした講座に参加し、実践力を高める。
わな猟狩猟免許の取得 (環境科目選択者のうちの希望者)	群馬県自然環境課 群馬県猟友会	野生動物の保護と管理を理解するために、狩猟免許試験を受験する。また、免許取得後は県の主催するわな猟初心者講習会に参加し、将来の捕獲の担い手を目指す。
環境・エネルギー関連施設の研究視察と作業体験 (環境科目選択者)	企業 自治体 法人関連施設	再生可能エネルギー関連事業所や環境対策設備を製造している事業所を研究視察する。また、清掃センター等の見学と、そこでの廃棄物の分別作業などの実習を行う。
環境科目特別授業 「地域の林業と鳥獣被害対策」 (環境科目選択者)	群馬県自然環境課 藤岡市農林課 藤岡猟友会	地域の自然環境を理解するために外部講師による授業を実施する。また、農作物への鳥獣被害対策として、専門家によるわなの製作と仕掛け方の講習会を実施する。

2) 実際の活動事例

①廃食用油回収協力事業

生徒会活動として回収を呼び掛け、2学期末で40リットルを回収し、市内のバイオマス発電事業者に提供しました。

②環境ボランティア活動と有価物による社会福祉貢献活動

- ・ 6 / 4 市天然記念物ヤリタナゴの生息地の環境保全活動 (18名参加)
- ・ 7 / 9、10 / 29 「ヤリタナゴ保護プロジェクト」に参加 (のべ21名参加)
- ・ 8 / 21、22 国史跡七輿山古墳周辺の竹の伐採環境整備活動 (12名参加)
- ・ 10 / 6 廃電線の就労支援事業所への提供と現地作業協力 (12名参加)

③「ぐんま環境学校」への参加

昨年度は、本校の生徒が高校生として初めて参加しました。今年度は4名の生徒が、講義6回、フィールドワーク・実習2回の講座を受講しました。

④わな猟狩猟免許の取得

生徒2名が、県内の高校生としてはじめてわな猟狩猟免許を取得し、5名の生徒が県自然環境課主催のわな猟初心者講習会に参加しました。

⑤環境・エネルギー関連施設の研究視察と作業体験

- ・ 9 / 8 公立藤岡総合病院新設外来棟の環境関連設備の見学（21名参加）
- ・ 11 / 17 桐生市清掃センターの施設見学と廃棄物分別実習（21名参加）



希少生物生息地の環境保全活動



廃電線の提供と作業支援活動

5 成果と今後の課題

1) 成果

- いろいろな環境学習や環境活動をプログラムに組み込むことで、参加枠組みに多様性をもたせることができ、その結果として学校全体や授業選択者、部活動単位といった活動形態が生まれました。
- 授業で環境工学について学習し、特別学習において具体的な省エネルギーや省資源化のあり方を検討したことにより、それまでは概念的に節電や節水を行っていたものが、一人ひとりが工夫をして環境保全活動を考えるようになりました。
- 校外での環境学習と環境活動を多く取り入れたため、地域社会との関わりや人々との協働をとおして、コミュニケーション力や学校の発信力が高まりました。

2) 課題

- 生徒により環境問題への意識の違いが見られることから、学校の教育活動をとおして環境問題への意識を高めていく方策を検討していくことが求められます。
- 今後は工業高校の特性を生かして、地域社会が必要とする環境対策のための「環境ものづくり」を取り入れ、人的な協働とともに地域社会に貢献できる環境活動の展開が必要であると考えています。
- 環境問題に対する学習や活動成果を、生徒の言語活動や課題解決能力の向上に役立てることができるよう、引き続き環境教育活動の創意工夫に取り組んでいくことが望まれます。